

令和八年一月度 御報恩御講拝読御書

生死一大事血脈抄

文永九年二月十一日

五十一歳

相構あいかまへ相構あいかまへて強盛ごうじょうの大信力だいしんりきを致いたして、南無妙法蓮華經りんじゅう臨終

正念しょうねんと祈念きねんし給たまへ。生死しょうじ一大事の血脈けちみやく此こより外ほかに全まったく求もとむるこ

となかれ。煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しょうじ即涅槃そくねはんとは是これなり。信心しんじんの血脈けちみやくなく

んば法華經ほけきょうを持たもつとも無益むやくなり。

令和八年一月度 御報恩御講 『生死一大事血脈抄』 (御書五一五〇一行目〜三行目)

【通釈】

くれぐれも強盛の大信力を起こして南無妙法蓮華經臨終正念と祈念しなさい。生死一大事の血脈は、これより外にまったく求めてはならない。煩惱即菩提・生死即涅槃とはこのことである。信心の血脈がなければ、法華經を受持しても無益である。

【主な語句の解説】

生死一大事…「生死」とは、三世に亘って生まれては死に、死んでは生まれることを繰り返すこと。「一大事」とは、その生死の中で最も大事なこと、人生の究極の根本的解決となるもの、との意。

血脈…仏法の教えが師から弟子へと受け継がれることを、身体の血管・血流や、血が親から子へと受け継がれることに譬える。臨終正念…死に臨んでも心を乱さず、妙法を唱えつつ成仏を正しく念じることをいう。

煩惱即菩提…煩惱とは心身を煩悩ませる一切のはたらき。菩提とは悟りの境地。爾前經で説くように煩悩を断じ尽くして菩提に至るのではなく、煩悩がそのまま菩提と開かれる、法華經の功德のことをいう。

生死即涅槃…生死を繰り返す迷いの苦しみがそのまま涅槃の悟りとなること。これも法華經の功德による。

【背景と大意】

本抄は、文永九(一二七二)年二月十一日、日蓮大聖人御歳五十一歳の時、佐渡の塚原で著され、最蓮房に与えられた御書です。

冒頭、大聖人は最蓮房の質問に答える形で、上行所伝・末法適時の南無妙法蓮華經を受持することが、過去・現在・未来の三世に亘る生死一大事の血脈を受け継ぎ、即身成仏する信行となる旨を示されます。

さらに、「日蓮が弟子檀那等自他彼此の心なく、水魚の思ひを成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱へ奉る処を、生死一大事の血脈とは云ふなり」(御書五一四)と述べられ、具体的にその血脈を受ける信心の在り方は、広宣流布を目指し、異体同心して南無妙法蓮華經と唱えていくことであると指南されています。

続いて、大聖人ご自身こそ地涌上行の再誕として末法に出現し、南無妙法蓮華經を流布することを示され、拝読の箇所では、その大法を強盛に受持信仰し、必ず即身成仏の大功德を成就するよう励まされ、本抄を結ばれています。